

新潟県の若者たち—その生活と労働

青年たちの悲鳴が上がっている。とりわけ小泉構造改革以降は新しい段階に入った。

不正規雇用が二四歳以下ではほぼ半数に達し、超低賃金と雇用不安が広がっている。月一〇万円そこそこでは、真つ当な日常生活も結婚も難しい。正規雇用の青年たちも長時間、過密労働のなか、過労と健康破壊が広がっている。またニート*やひきこもり青年たちからは、声にはならない悲鳴が上がっている。

以前は、一応は雇用保障と賃金アップの保障があった。これを根本から破壊し、さらに加速させているのが小泉「改革」である。

その基本方針である新自由主義に

よる構造改革は、際限ない競争をうみ、弱肉強食社会をもたらす。底辺に追いやられた若者たちから、やがては道德的退廃に陥っていく者も出てくる。犯罪の多発が心配される。

日本では、多くの若者たちが小泉自民党を支持し、圧勝させたといわれている。一方フランスでは若者にしわ寄せする雇用法に対して、青年たちが反撃し挫折させた。日本の若者とフランスの若者はどこに違いがあるのだろうか。わたくしたちも知りたいところだ。

昨今の日本に渦巻く若者たちの悲鳴にもかかわらず、有効な手助けがとられていない。一般に労働者や市民も同じ状態に追いこまれ、先が見

えない。

従来の市民、組合、平和運動等は、多くの青年たちにとってダサイ、イカサナイとみられるようになった。

年配者、高齢者の姿はあっても、青年たちの姿を見かけなくなつて久しい。

ライブ、車、アルビレックス新潟、漫画のコミックマーケット等には、大変な数の青年たちが集まっている。中越大震災はじめ災害ボランティアや環境問題では、青年たちの活躍がめだっている。こうした動きをどのように見たらよいだろうか。

青年たちのこのエネルギーをどう生かしたらいいのか、ともに考えたい。

青年問題は青年たちだけの問題でなく、国民的な問題である。そんな思いから本特集を試みた。

*無職で就学も職業訓練もしていない青年